



日本植物病理学会ニュース 第71号

(2015年8月)

【評議員選挙電子投票のお知らせ】

平成 28～29 年度評議員選挙は電子投票により行います。電子投票が行えない方は、従来の郵送による投票も行えます。詳しくは、81 巻 2 号青ページに掲載されている選挙告示をご覧ください。

【学会等行事予定カレンダー公開のお知らせ】

日本植物病理学会及び関連学会などの行事予定を、学会ホームページにてカレンダー形式で公開しています。

<http://www.ppsj.org/event/calendar1.html>

【名誉会員・永年会員の略歴とお話】

名誉会員 眞山滋志



略歴：1944 年 4 月 25 日、京都市生まれ、1968 年 3 月京都大学農学部農林生物学科卒業、1970 年 3 月同大学院農学研究科農林生物学専攻修士課程修了、1973 年 8 月南イリノイ大学大学院生命科学研究科植物学専攻博士課程卒業、Ph.D. 取得、1973 年 8 月ネブラスカ大学農業

生化学研究所研究員、1975 年 4 月日本学術振興会特別研究員、1977 年 4 月香川大学農学部園芸学科助手、1983 年 3 月農学博士（京都大学）取得、1983 年 11 月カリフォルニア大学（UCR）客員研究員（～1984 年 10 月）、1986 年 7 月香川大学農学部生物機能化学科助教授、1989 年 12 月神戸大学農学部植物防疫学科助教授、1995 年 4 月同学部生物環境制御学科教授、2002 年 4 月農学部長、2005 年 2 月神戸大学理事・副学長、2007 年 2 月同大学院農学研究科生命機能科学科教授、2008 年 3 月定年退職、神戸大学名誉教授。2008 年 4 月タキイ園芸専門学校講師、2013 年 4 月吉備国際大学地域創成農学部長、2015 年 4 月吉備国際大学学長。1996 年井植文化賞（科学技術部門）、1997 年日

本植物病理学会賞「エンバク冠さび病特異的抵抗性発現に関わるファイトアレキシの細胞・生理・遺伝学的研究」、2004 年兵庫科学賞。学会活動：評議員、学会誌（JGPP）編集長（2000～04 年）、学会長（2007 年度）、国際植物-微生物相互関係学会理事（1999～2003 年）、国際植物病理学会評議員、日本農学会評議員など。

著書：植物病理学（文永堂、2010）、最新植物病理学（養賢堂、2000）、植物病理学事典（養賢堂、1995）、Delivery of Pathogen Signals to Plants（APS, St. Paul., 2010）他。以上いずれも共著。

この間、コムギ黒さび病品種特異的抵抗性現象に興味を抱きネブラスカ大学に J.M. Daly 教授を訪問以来、香川大学、神戸大学などでエンバク冠さび病品種抵抗性、イネ科植物いもち病種特異的寄生現象やトマト青枯病の生物防除などに関する研究教育に取り組めたことに感謝しています。学会は本年 100 周年を迎えていますが次なる 100 年を目指して進展することを祈念いたします。最後に、今日まで、ご指導およびご協力をいただきました恩師、先輩、同僚ならびに多くの学会員、卒業生の皆様に心より感謝申し上げます。

名誉会員 露無慎二



1944 年 7 月 6 日上海生まれ、翌年引揚。1967 年静岡大学農学部農学科卒業。東京教育大学農学研究科修士課程中退、1970 年 California 大学 Davis 校理学研究科修士課程修了。1973 年 Hawaii 大学院理学研究科 Ph.D. 課程修了。Purdue 大学生命科学部 Postdoctor. 1974 年静岡大学農学部助教授として採用、1995 年教授。総合科学技術大学院教授。遺伝子実験施設長、評議員、副学長併任。2009 年定年退職後、名誉教授、特任教授。静大発ベンチャー

Eu-BS 社を設立し現在に至る。静岡大学在任中、米国 Kansas 州大、ベルー国立農業大学院博士課程外国人教授、タイ国 Kasetsart 大及び Mongkut 王工科大で王立基金博士課程学生アドバイザー、仏応用科学研究所、Scotland 作物研究所との研究者交流。

米国留学時代、分子微生物学の基礎研究 (*PNAS*, *Genetics*, *J. Bact.*)。静岡大学では、恩師岡部、後藤両名誉教授が築かれた植物病原細菌学の教育・研究を継承。①軟腐病菌グループの主要発病因子ペクチン酸リアーゼについて、Product Induction 機構 (*Nature*)、制御遺伝子 *kdgR* の機能解析 (*MPMI*)、Self Catabolite 抑制機構 (*J. Bact.*)、植物体内超誘導機構 (*PNAS*) など発見。さらに *Dickeya dadantii* 全ゲノム共同解読、プロテオミクス解析 (*Proteome Res.*) も行った。②狭宿主病原細菌では、カンキツかいよう病菌などの *hrp* 遺伝子群、新規 *hrp* 制御遺伝子、エフェクター Pth 結合タンパク質 (PME) の解析。さらに *avr* 遺伝子群が共通してサプレッサー機能をも示す“*avr* 二元説” (*JGPP*, *PMPP*) 提唱。1998 年に日本植物病理学会賞、2001 年には米国アカデミー微生物学フェロー受賞。

学会活動：本学会評議員、関西部会長、関西部会・大会（静岡市）開催委員長、副学会長・学会長、アジア植物病理学会副会長、国際植物病理学会評議員、日韓植物病理学会間協定締結、第 9 回日米科学セミナー主催（静岡市）他。

著書：植物病理学事典（分担、養賢堂）、新編植物病理学概論（共著、養賢堂），“Genomics and Genetic Analysis of Plant Parasitism and Defense”（編集代表、APS）他。

最後に、ご指導、ご交誼、ご協力を賜った恩師、同僚、先輩、友人、卒業生の皆様に衷心より御礼申し上げたい。本学会創立百周年を迎えた喜びを分かち合い、今後更なるグローバルな発展を続けることを祈念します。

永年会員 荒井 啓



略歴：昭和 14 年 6 月 3 日、大阪府生まれ。昭和 38 年 3 月大阪府立大学農学部農学科卒業。昭和 44 年 3 月東京大学大学院農学系研究科農業生物学専攻博士課程修了、農学博士「ジャガイモ葉巻ウイルスに関する研究」。昭和 44 年 4 月東京大学農学部研究生、同年 4 月日本学術振興会奨励研究員を経て、昭和 47 年 6 月東京大学農学部助手、昭和 48 年 10 月鹿児島大学農学部助教授、昭和 61 年 10 月同教授。昭和 63 年 4 月鹿児島大学大学院連合農学研究科

教授併任。平成 2 年 6 月から平成 3 年 4 月まで文部省在外研究員（カナダアルバータ大学、アメリカ合衆国カリフォルニア大学）。平成 11 年 7 月から平成 17 年 3 月まで鹿児島大学評議員および、平成 13 年 4 月から平成 17 年 3 月まで連合農学研究科長併任。

学会：評議員、九州部会長

著書（共著）：植物ウイルス事典、植物病理学事典、日本植物病害大事典

研究歴：大阪府立大学にて高橋實先生、田中寛先生に研究の手ほどきをしていただいた。東京大学にて明日山秀文先生、與良清先生、土居養二先生、寺中理明先生のご指導の下で、ジャガイモ葉巻ウイルス、ソラマメ萎縮ウイルス、サトイモモザイクウイルス、カンキツかいよう病菌ファージ、そのほかの研究を行いました。鹿児島大学では、主として南九州のイネ、チャ、サトウキビ、カンキツ、ニンニク、グラジオラス、パッションフルーツなどの病害研究に従事しました。

最後に、ご指導およびご協力いただいた多数の先輩、同僚ならびにご協力いただいた卒業生の皆様に心より感謝申し上げますとともに、学会のますますのご発展を祈念いたします。

永年会員 原田幸雄



略歴：昭和 14 年 5 月 28 日北海道生まれ。昭和 37 年北海道大学農学部農業生物学科卒業。同年弘前大学農学部植物病理学研究室助手に採用。昭和 45 年助教授、51 年「日本産 *Monilinia* 属菌に関する研究」で農学博士。平成 3 年教授、4 年岩手大学大学院連合農学研究科教授併任、9 年弘前大学の学部改組にともない農学生命科学部教授、17 年定年退職。同年弘前大学名誉教授。

研究歴：研究生活は上司の照井陸奥生教授からあたえられたリンゴモニリア病の培養試験から始まり、その後は周囲の要望や自らの関心でテーマを選び紆余曲折しながら学生相手に終始研究に没頭できた。主な課題は、①日本産 *Monilinia*（アナモルフ *Monilia*）属菌の分類同定と培養性状。なかでもアメリカの核果灰星病菌 *Monilinia fructicola* を日本ではじめて同定報告したこと、本属に 3 新種（宿主はそれぞれウメ、シウリザクラ、ヤマツツジ）を見出したことなどが思い出深い。②森林樹木の新病害と病原菌の分類同定。このうち、多犯性菌として有名な環紋葉枯病菌

(アナモルフ *Cristulariella*) は菌核病菌科の *Grovesinia* (新アナモルフ *Hinomyces*) と新属 *Nervostroma* (アナモルフ *Cristulariella*) の2属からなることを明らかにした。③植物さび菌の生活環、リンゴおよびナシ赤星病菌の宿主範囲と生態、また異種寄生さび菌の交代宿主の探索などに多年取り組んだ。後者では約20種のさび菌においてさび胞子、冬胞子両世代の宿主関係を初めて明らかにした。

学会活動：昭和37年より正会員，平成5～18年評議員，平成9～10年東北部会長。

著書：「キノコとカビの生物学」（平成5年），「新編植物病原菌類解説」（共著，平成8年）。

近況とお礼：植物病理学に志して53年，あらためて斯学の発展と伝統の重みを感じる。退職後は野外の植物観察や菌類採集を続けている。これまでご教示いただいた諸先輩，会員諸氏，在職中研究の一翼を担われた当時の学生諸君に感謝し，この場をかりて厚くお礼申し上げます。

永年会員 倉橋良雄



1939年4月17日岐阜県生まれ。1963年岐阜大学農学部農学科卒業。同年長野県農業試験場病害虫研究室に奉職。1966年日本特殊農薬製造（株）研究所に転職，殺菌剤研究室に配属。1999年日本バイエルアグロケム（旧日本特殊農薬，後にBCS）を停年退職。同年理化学研究所微生物制御研究室で共同研究員となる。2005～2011年明治大学農学部植物病理学研究室客員研究員として研究した。

植物病理学との関わりは，1959年秋大学の講演会で江上不二夫先生の講演を聴講したことに始まった。その内容は，抗生物質耐性赤痢菌の耐性遺伝子がコードされたプラスミドが赤痢菌と大腸菌の間でやり取りされて，耐性が伝搬するとの話だった。初めて聞いた話だったが，その時なぜか強く惹かれ，生理活性物質，抗菌活性，耐性菌などの専門的用語が新鮮で深く心に残った。その後迷わず植物病理学研究室を専攻し，抗菌物質への興味を抱いて植物病理学と抗菌性物質研究の道を歩むこととなった。1963年以来日本植物病理学正会員となり研究成果を発表し，投稿論文のレフェリーを務めた。

長野農試では農林省の発生予察事業特殊調査「いもち病菌の菌型に関する共同研究」で，下山守人氏のもと主として関東東山地区のいもち病菌 race 分布の検定を担当し，いもち病の基礎を学んだ。

日本特殊農薬製造（現BCS）の研究所では，殺菌剤のスクリーニングと研究，開発を担当した。その頃，カスミンが灌注処理によっていもち病に高い効力を示すとの報告が岩手農試からあり，浸透性いもち剤探索の研究を始めた。灌注処理でいもち病に有効な化合物を選抜する試験法を開発した。それまでは浸透性の選抜試験が行われておらず，まず過去に合成され残されていたサンプルを試験し，その中に極めて高い効力を示す4703（＝NTN 3318）を見出した。4703は委託試験が実施され，いもち病と紋枯病に高い効果を示すことが圃場で実証された。残念ながら残留値が高く開発には至らなかったが，浸透殺菌剤への興味が増し，後にカルプロバミドの開発へと繋がった。

一方，新規化合物の中にも興味あるリード化合物を見出し，合成者と相談の上，誘導が進んだ。その結果から構造活性関係を推測し，効力が上昇していった。十指に余る開発候補化合物を見出したが，多くは効力以外の理由で開発に至らなかった。しかしペンシクロン，カルプロバミドとイソチアニルの3化合物は幸運にも開発された。その間，研究所長だった久山真平博士にはさまざまなご助力を頂き，また多くの研究員には種々の実験，研究にご尽力を頂いた。

カルプロバミドの特性や作用機構を詳しく研究し，最初のMBI-D剤であることを明らかにした。研究の主な結果を取り纏め，「イネいもち病防除剤カルプロバミドの開発と作用機構に関する研究」で2001年に東京大学農学部より学位を取得した。その研究では，理化学研究所山口勇博士のご指導を頂き，学位の取得に際し東京大学大学院教授日比忠明先生のご指導とご高閲を頂いた。ご指導頂きました諸先生，実験に関わった研究員に心より感謝致します。

永年会員 松本 勤



1939年5月18日北海道生まれ。1964年弘前大学農学部卒業，1970年北海道大学大学院博士課程修了，農学博士，恩師村山大記先生にご指導を賜わった。1970年秋田大学医学部生化学講座助手を経て，1973年秋田県立農業短期大学助教授に採用，1982年教授。1999年秋田県立大学の創設により農業短期大学が秋田県立大学短期大学部となり，短期大学部長を拝命，2005年定年退職，名誉教授。

学会では1964年から正会員，1980年から東北部会幹事，1992年～1995年編集委員，1999年～2000年東北部会長。

次に、共同研究者や研究室の卒業生の若いパワーに支えられ、1973年から取り組んだ主な研究内容を紹介する。1978年、植物ウイルス病の研究分野に極めて特異性の高いモノクローナル抗体を導入した。当時、神奈川県衛生研究所研究員井上正保氏と共同研究を組み、TMVとToMVを用い成功させた。その後モノクローナル抗体は種々の植物ウイルス病の診断に威力を発揮した。

弱毒ウイルスによる防除で、L11Aの開発者である当時の北海道農試後藤忠則氏から分譲された由緒正しいL11Aが秋田県のトマトウイルス病防除に効果を示さなかった。

しかし、千葉県のL11A (L11A-C)と福島県のL11A (L11A-F)は効果を示し、L11A-Fが最も強い干渉効果を示した。分子遺伝学的にもL11A-CとL11A-FはL11A由来の突然変異株であった。これら供試L11Aの弱毒性に関与する共通の塩基置換の位置を元秋田県農試研究員の山本英樹氏と共に研究した結果、2350番目の塩基置換(A→G)が弱毒性に関与していることが、GをAに復帰変異させた実験によっても確認できた。

オーニソガラムシルソイデスの病原ウイルスとして、ポティウイルスのOrMVは知られていたが、RT-PCR検定によって新規ポティウイルス2種の重複感染を秋田県立大学の藤晋一氏との共同研究で確認できた。3種のウイルスの重複感染罹病葉からモモアカアブラムシ一頭ずつでウイルスの単離に成功し、各ウイルスの酷似した諸性質を明らかにした。ウイルスフリーのオーニソガラムの耐寒性は抜群に強く、秋田県での冬期無加温ビニールハウス栽培が可能となった。

永年会員 大口富三



1939年5月1日、愛知県生まれ、1962年3月岐阜大学農学部農学科を卒業、1964年3月京都大学大学院農学研究科農林生物学専攻修士課程修了、1965年12月博士課程中途退学、1966年1月京都大学農学部助手に採用、1968年1月愛媛大学農学部講師、1970年4月同助教授、1977年から1979年ハワイ大学農学部植物病理学講座のDr. Suresh Patilの下でインゲンかき枯病原細菌のインゲン感染部位における毒素産生について研究、1984年1月「ベと病罹病ダイコン組織の病態生理学的研究」で京都大学より博士の学位を取得、1986年中国西南農業大学校で集中講義、1990年5月愛媛大学農学部教授、2005年3月定年

退職、愛媛大学名誉教授。学会の平成2年度大会開催を補佐、2004年10月関西西部会の委員長を務めた。

タイで採集したイネいもち病菌の生態種検定やごま葉枯病罹病水耕栽培イネのアミノ酸代謝を研究した後、愛媛大学ではダイコンベと病菌を研究課題とした。抵抗性ダイコン品種時無の根組織ではべと病菌菌糸の生育が著しく抑制され、その周辺にリグニンが生成される。罹病組織のペルキオシダーゼ(Per)を抽出し硫酸塩析後、CM、DEAEセルロースカラムクロマトグラフィと電気泳動的等電点分画法でそれぞれ11分画、16アイソザイム(PI)に分けた。健全根組織から酵素処理により遊離単細胞とプロトプラストを作製し、これらを罹病根組織摩砕液に浸漬処理すると遊離単細胞の特定PIが活性増大した。リグニン前駆物質として、新たに合成したコニフェリルー(C)、シナピルー(S)とパラクマリルアルコール(PC)を用い、前述の11分画で脱水素重合物(重合物)を作製した。罹病により活性増大するPIと重合物を生成しうる分画とを比較して、罹病組織で葉組織細胞壁木化に関与すると思われるPIを推定した。生成した重合物はリグニン類似の性質を示した。

最後に、御指導を頂いた恩師赤井重恭、橋岡良夫、池上八郎、獅山慈孝、上山昭則、福富雅夫、大内成志、浅田泰次の各先生と多くの学会員、卒業生の皆様に心より感謝申し上げますとともに、本学会の益々のご発展を祈念いたします。

永年会員 鳥山重光



略歴：1939年青森県生まれ。1963年3月、東京農工大学農学部農学科卒業。1968年3月東京大学大学院農学系研究科博士課程終了、農学博士。1968年4月東京大学文部教官助手に採用。1977～1978年、オランダ国立農科大学・ウイルス部門に留学。1986年農林水産技官に転任。2000年、農業環境技術研究所環境生物部(上席研究官)定年退職。1993年東京農工大学大学院特別講義講師、2001～2010年明治大学で講師、生命科学科の「ウイルス学概論」、「大学院特別講義」、農学科の「植物ウイルス学」を担当。

大学院に進学した昭和43年(1968)当時、わが国のウイルス病研究は遅れていた。植物病理学研究室では恩師明日山秀文教授、與良清助教授が文部省の科学研究費を得て全国的な研究班を組織し、「我国に発生する農作物のウイ

ルスの種類と同定の研究」に力を注いでいた。私の研究テーマも「イネ科の野草や牧草類に発生するウイルス」に関するものであった。

オランダ留学をきっかけにイネ縞葉枯ウイルスの研究に取り組むことにした。偶然に見つけたウイルス精製法を採用し、病原性分画を発見。病原性発現には RNA 複製酵素遺伝子を含む粒子の存在が必須であること、つまり 8 nm 幅の極細長い糸状の粒子には RNA 転写酵素が付随していることを解明した。ウンカ伝播性で、虫体内増殖するイネ縞葉枯ウイルスは、被膜をもつダニや蚊伝播性の動物ウイルスと似た性状をもつことが分かった。高橋真実（旧姓福原）と数名の大学院生たちの協力を得て縞葉枯ウイルスとグラシースタントウイルスの全ゲノム解析を終了できた。これら一連の研究は海外から評価をうけ、幸い新しいタイプのテヌイウイルス属の新設に寄与することができた。

研究生生活の後半、東京大学理学部岡田吉美教授のご懇篤なるご指導を賜った。近著に、『水稻を襲ったウイルス病—縞葉枯病の媒介昆虫と病原ウイルスの実像を探る—補遺：高田鑑三の論文「萎縮病稲試験成績」(1895)の再評価』（2010、創風社）、『黎明期のウイルス研究—野口英世と同時代の研究者たちの苦闘』（2008、創風社）がある。

永年会員 山本孝彦



昭和 14 年 11 月 29 日愛媛県に生まれる。昭和 39 年 3 月三重大学農学部（現生物資源学部）卒業。直ちに当時の農林水産省四国農業試験場に入省した。その後、富山県農業技術センター野菜花き試験場（球根病害指定試験地）、四国農業試験場、中国農業試験場に勤務し平成 12 年（2000 年）3 月に退職した。退職後、国際協力機構（JICA）の農業技術専門家としてインドネシア、タンザニア連合共和国で流行しているダイズ、イネのウイルス病の診断、防除の技術移転の仕事に携わった。初任地では、1960 年代頃早期栽培イネに多発していたイネ縞葉枯病の防除の仕事に加わった。感染イネに認められる特異蛋白を、ろ紙電気泳動法により検出する仕事に携わり、この成果が私の最初の学会発表となった。丁度、日本植物病理学会創立 50 周年の記念大会であった。現在の電気泳動法の技術を考えてみると、幼稚で隔世の感に堪えない。その後、稲作の減反政策のためイネの病害研究は中止となり、研究の主体はイネから野菜病害へと移り、当時西日本のキュウリ、カボチャな

どワリ類に多発し被害が大きかったカボチャモザイクウイルス（WMV）の研究に取り組んだ。WMV については我が国ではキュウリ、エンドウなどでの発生が数例報告されているにすぎず発生生態など詳細については不明であった。とりあえず、四国地方のキュウリにおける本ウイルスの発生状況の調査から始めた。続いて、品種抵抗性、病原ウイルスの性状、系統、ウイルスのアブラムシ伝染、伝染に関与するアブラムシの種類、ウイルスの伝染源植物と伝染環、ウイルスの診断方法と防除法など、伝染病学的見地から本ウイルスの性質や発生生態を明らかにすることが出来た。本研究により 1984 年大阪府立大学より学位を授与された。

三十数年にわたる研究生生活の間、多くの方々のご指導を頂いた。すでに鬼籍に入っておられる方も多いが、本稿を借りて厚くお礼申し上げますとともに、本学会の益々の発展を祈念致します。

永年会員 植松 勉（執筆ご辞退）

【受章のお知らせ】

本会名誉会員の名古屋大学名誉教授、道家紀志氏が、平成 27 年春の叙勲において瑞宝中綬章を受章されました。瑞宝章は、公務などに長年にわたり従事して功労を積み重ね、成績を挙げたことにより国が授与する章です。道家紀志氏は、ジャガイモの難防除病害である疫病の克服を目指した基礎的・応用的研究を展開し、特に植物の動的防御応答の始動と制御に働く「オキシダティブバースト（一過的かつ急激な活性酸素生成）」現象を発見し、独創的かつ先駆的な研究成果を挙げられました。同氏は、平成 9 年日本植物病理学会賞、同 13 年米国植物病理学会フェロー、同 17 年日本農学会賞及び読売農学賞を受賞されるとともに、当学会の評議員や学会長などを務められ、当学会の発展並びに農学の教育・研究に多大な貢献をされました。（川北一人）

【会員の動静】

1. 人事

（1）大学関係

増田 税	H27.4	北海道大学 農学研究院 植物病原学研究室 教授
宮下脩平	H27.4	東北大学 大学院農学研究科 植物病理学分野 助教
鈴木智子	H27.4	日本女子大学 理学部 助教
市川和規	H27.4	東京大学 大学院農学生命科学研究科 植物医科学研究室

		特任教授			研究領域長
篠原弘亮	H27.4	東京農業大学 農学部 植物病理学研究室 教授	藤本岳人	H27.4	農研機構・北海道農業研究センター 生産環境研究領域 任期付研究員
柏 毅	H27.6	理化学研究所 環境資源科学センター ケミカルバイオロジー研究グループ 特別研究員	御子柴義郎	H27.4	農研機構・東北農業研究センター 研究領域長 兼 研究支援センター長
千葉壮太郎	H27.1	名古屋大学 アジアサテライトキャンパス学院 特任准教授	今崎伊織	H27.4	農研機構・東北農業研究センター 企画管理部 業務推進室企画チーム チーム長
	H27.1	名古屋大学 大学院生命農学研究科 資源生物機能学（植物病理学研究分野） 特任准教授	善林 薫	H27.4	農研機構・東北農業研究センター 生産環境研究領域 主任研究員
稲垣善茂	H27.4	神戸女子大学 文学部 教育学科 教授	永坂 厚	H27.4	農研機構・東北農業研究センター 生産環境研究領域 主任研究員
田村勝徳	H27.1	岡山大学 大学院 自然科学研究科 講師	竹中重仁	H27.4	農研機構・近畿中国四国農業研究センター 所長
兵頭 究	H27.4	岡山大学 大学院 資源植物科学研究所 助教	関口博之	H27.4	農研機構・近畿中国四国農業研究センター 企画管理部 業務推進室企画チーム チーム長
荒瀬 榮	H27.4	島根大学 理事（教育・学生支援担当副学長）	平八重一之	H27.4	農研機構・九州沖縄農業研究センター 生産環境研究領域 研究領域長
竹下 稔	H27.4	宮崎大学 農学部 植物生産環境科学科 植物病理学研究室 教授	宮坂 篤	H27.4	農研機構・九州沖縄農業研究センター 生産環境研究領域 上席研究員
岩井 久	H27.4	鹿児島大学 学術研究院農水産獣医学域農学系・農学部 農学系長・農学部長	佐藤豊三	H27.4	農業生物資源研究所 遺伝資源センター 研究専門員
(2) 農水省関連独法関係			對馬誠也	H27.4	農業環境技術研究所 生物生態機能研究領域 研究専門員
岩波 徹	H27.4	農研機構・果樹研究所 リンゴ研究領域 研究領域長	畔上耕兒	H27.3	[退職 農研機構・野菜茶業研究所 野菜生産技術研究領域 上席研究員]
佐々木厚子	H27.4	農研機構・果樹研究所 品種育成・病害虫研究領域 主任研究員	(3) 都道府県試験研究機関関係		
大田将禎	H27.4	農研機構・果樹研究所 品種育成・病害虫研究領域 研究員	竹内 徹	H27.4	北海道立総合研究機構 農業研究本部
藤原和樹	H27.4	農研機構・果樹研究所 品種育成・病害虫研究領域 任期付研究員	相馬 潤	H27.4	北海道立総合研究機構 中央農業試験場 企画調整部
仲川晃生	H27.4	農研機構・野菜茶業研究所 野菜生産技術研究領域 上席研究員	佐々木純	H27.4	北海道立総合研究機構 花・野菜技術センター 生産環境部
眞岡哲夫	H27.4	農研機構・北海道農業研究センター 生産環境研究領域	小澤 徹	H27.4	北海道立総合研究機構 中央

		農業試験場 病虫部			生産環境・安全管理研究担当
東岱孝司	H27.4	北海道立総合研究機構 十勝			担当部長
		農業試験場 生産環境部	宇賀博之	H27.4	埼玉県農業技術研究センター
池田 信	H27.4	北海道立総合研究機構 花・			生産環境・安全管理研究担
		野菜技術センター			当 主任研究員
北畠国昭	H27.4	北海道オホーツク総合振興局	平野泰志	H27.4	埼玉県農業技術研究センター
		網走農業改良普及センター			品種開発・ブランド育成研究
		美幌支所			担当 専門研究員
荒井茂充	H27.4	青森県産業技術センター り	酒井和彦	H27.4	埼玉県農業技術研究センター
		んご研究所 所長			生産環境・安全管理研究担当
山端直樹	H27.4	青森県農林水産部 食の安			専門研究員
		全・安心推進課	久保周子	H27.4	千葉県農林総合研究センター
富永朋之	H27.4	岩手県宮古農業改良普及セン			暖地園芸研究所 野菜・花き
		ター 岩泉普及サブセンター			研究室 上席研究員
		上席農業普及員	小塚玲子	H27.4	千葉県海匝農業事務所 改良
勝部和則	H27.4	岩手県沿岸広域振興局農林部			普及課 普及指導員
		宮古農林振興センター 農政	竹内 純	H27.4	東京都農林総合研究センター
		推進課長			江戸川分場 分場長
外舘光一	H27.4	岩手県大船渡農業改良普及セ	星 秀男	H27.4	東京都農林総合研究センター
		ンター 上席農業普及員			生産環境科 病害・虫害管理
浅利正義	H27.4	秋田県鹿角地域振興局農林			研究チーム 主任研究員
		部 次長	小野 剛	H27.4	東京都小笠原支庁産業課 小
後藤新一	H27.4	山形県農林水産部 農業技術			笠原亜熱帯農業センター 主
		環境課 安全農産物主査			任
佐野真知子	H27.4	福島県県中農林事務所須賀川	野村 研	H27.6	神奈川県庁 政策局政策部
		農業普及所 経営支援課			科学技術・大学連携課 主査
沼田慎一	H27.2	茨城県農業総合センター 園	小木曾秀紀	H27.4	長野県農業試験場 企画経営
		芸研究所 花き研究室 技師			部 主任研究員
青木一美	H27.4	茨城県県西農林事務所坂東地	市川 健	H27.4	静岡県農林技術研究所 果樹
		域農業改良普及センター 地			研究センター センター長
		域普及第一課 主任	斉藤千温	H27.4	静岡県病虫害防除所 主任研
和氣貴光	H27.4	栃木県塩谷南那須農業振興事			究員
		務所 主任	田中弘太	H27.4	静岡県東部農林事務所 主任
青木久美	H27.4	栃木県農政部生産振興課 技	原田朋菜	H27.4	静岡県賀茂農林事務所 技師
		師	原澤良栄	H27.4	新潟県農業総合研究所 基盤
柴田 聡	H27.4	群馬県農業技術センター こ			研究部 部長
		んにゃく特産研究センター	松澤清二郎	H27.4	新潟県農業総合研究所 作物
		センター長			研究センター 専門研究員
三木静恵	H27.4	群馬県農政部 技術支援課	藪 哲男	H27.4	石川県農林水産部 生産流通
		生産環境室植物防疫係 主幹			課 流通販売グループ 課長
矢ヶ崎健治	H27.4	埼玉県農業技術研究センター			補佐
		品種開発・ブランド育成研究	上垣陽平	H27.4	石川県農林総合研究センター
		担当 担当部長			農業試験場 資源加工研究部
植竹恒夫	H27.4	埼玉県農業技術研究センター			生物資源グループ 主任技師

足立昌俊	H27.4	岐阜県西濃農林事務所 技術主査	山口純一郎	H27.4	佐賀県農業試験研究センター 有機・環境農業部 部長
武山桂子	H27.4	愛知県農業総合試験場 企画普及部 広域指導室 専門員	稲田 稔	H27.4	佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部 部長
吉川正巳	H27.4	京都府農林水産技術センター 農林センター 病虫害防除所 長 兼 環境部長	成富毅誌	H27.4	佐賀県生産振興部 園芸課 技師
西村幸芳	H27.4	大阪府立環境農林水産総合研究所 食の安全研究部 防除グループ 研究員	内川敬介	H27.4	長崎県農林技術開発センター 果樹・茶研究部門
増田吉彦	H27.4	和歌山県農業大学校 副校長	吉松英明	H27.5	大分県農林水産研究指導センター 農業研究部 水田農業グループ グループ長
島津 康	H27.4	和歌山県果樹試験場 総括研究員 兼 環境部長事務取扱	鳥越博明	H27.4	鹿児島県農業開発総合センター 生産環境部 部長
武田知明	H27.4	和歌山県那賀振興局 地域振興部 農業振興課 副主査	澤岨哲也	H27.4	沖縄県農業研究センター名護支所 果樹班 主任研究員
大谷洋子	H27.4	和歌山県農業試験場 環境部 主査研究員	新崎千江美	H27.4	沖縄県宮古農林水産振興センター 農業改良普及課 主任
宇山啓太	H27.4	鳥取県農業試験場 研究員	安次富 厚	H27.4	沖縄県農業研究センター 病虫害管理技術開発班 研究員
長谷川優	H27.4	鳥取県農業試験場 環境研究室 室長	赤坂安盛	H27.3	[退職 岩手県中央農業改良普及センター 所長]
井上幸次	H27.4	岡山県農林水産総合センター 農業研究所 果樹研究室 特別研究員（室長事務取扱）	野田 聡	H27.3	[退職 埼玉県農林総合研究センター 園芸研究所 研究所長]
川口 章	H27.4	岡山県農林水産部 農産課 園芸振興班 主任	市川和規	H27.3	[退職 山梨県総合農業技術センター 所長]
香口哲行	H27.4	広島県立総合技術研究所農業技術センター 技術支援部 総括研究員	瓦谷光男	H27.3	[退職 大阪府立環境農林水産総合研究所 食の安全研究部 防除グループ 主任研究員]
重田 進	H27.4	山口県農林総合技術センター 農業技術部 土地利用作物研究室 室長	吉本 均	H27.3	[退職 和歌山県農業試験場 暖地園芸センター 所長]
唐津達彦	H27.4	山口県岩国農林事務所 産地振興課 主査	佐古 勇	H27.3	[退職 鳥取県西部農業改良普及所大山支所 所長]
広田恵介	H27.5	徳島県東部農林水産局 農業支援第二担当 課長補佐	2. 学位取得者（過程博士・論文博士）		
三好孝典	H27.4	愛媛県農林水産研究所農業研究部 部長	劉 錦妍	H27.3	北海道大学 大学院農学院 博士（農学） Turnip mosaic virus に感染した Arabidopsis 生態型 Ler の全身えそ症状を決定する TuNI 遺伝子の同定及び発現解析
奈尾雅浩	H27.4	愛媛県農林水産部農業振興局 農産園芸課環境農業係 係長			
下元祥史	H27.4	高知県農業振興部 環境農業推進課 研究安全管理担当 主幹	鈴木智貴	H26.3	岩手大学 連合農学研究科 博士（農学） 東北地方南部においてイネ科雑草にいち
梶谷裕二	H27.4	福岡県農林業総合試験場 生産環境部			

		病を起こす <i>Pyricularia</i> 属菌に関する研究
煉谷裕太郎	H27.3	東京大学 大学院農学生命科学研究科 博士(農学) ファイトプラズマの主要抗原膜タンパク質および接着因子に関する研究
白石拓也	H27.3	東京大学 大学院農学生命科学研究科 博士(農学) フレキシウイルスに対する高度抵抗性に関する分子遺伝学的研究
湊 菜未	H27.3	東京大学 大学院農学生命科学研究科 博士(農学) ファイトプラズマ感染による不稔症状を引き起こす病原性因子に関する研究
三浦千裕	H27.3	東京大学 大学院農学生命科学研究科 博士(農学) ファイトプラズマの宿主転換に伴う遺伝子の発現および機能に関する研究
柏 毅	H27.3	東京農工大学 連合農学研究科 博士(農学) キャベツ萎黄病菌の病原性関連小型染色体と特異識別技術に関する研究
榎野友香	H27.3	名古屋大学 大学院生命農学研究科 博士(農学) 牧草共生糸状菌の共生確立に関与する活性酸素生成制御因子の機能解析
三宅律幸	H27.3	岐阜大学 連合農学研究科 博士(農学) 高温生育性 <i>Pythium</i> 属菌による病害の発生生態の解明および防除法の開発
Md. Mahfuz Alam	H26.9	愛媛大学 連合農学研究科 博士(農学) Molecular biological studies on probenazole inducible rice genes: <i>OsAP77</i> and <i>OsHAP2E</i>

Sumyya Waliullah	H27.3	愛媛大学 連合農学研究科 博士(農学) Analysis of the pathogenic function of <i>Cauliflower mosaic virus</i> multifunctional protein Tav (Transactivator/viropasmin) in transgenic tobacco
榎林大樹	H27.4	京都大学 農学系研究科 博士(農学) Roles of the untranslated region of bromovirus genomic RNA in viral multiplication
井上博喜	H26.9	九州大学 大学院生物資源環境科学府 博士(農学) 鉄コーティング処理によるイネ種子伝染性病害の制御とその作用機構に関する研究
西 八東	H26.9	鹿児島大学 大学院連合農学研究科 博士(農学) 鹿児島県におけるジャガイモそうか病の原因菌と防除に関する研究

【新入会員情報】

青野桂之	種苗管理センター北海道中央農場 業務第1部種苗生産チーム
小形智子	北海道空知農業改良普及センター
菅 広和	岩手県農業研究センター 環境部 病理昆虫研究室 主任専門研究員
堀越紀夫	福島県農業総合センター会津地域研究所 主任研究員
加藤太朗	宇都宮大学 工学部 応用化学科 産学官連携研究員
松本 直	農研機構中央農業総合研究センター 病害虫研究領域 抵抗性利用チーム 任期付研究員
瀬尾茂美	農業生物資源研究所 植物科学研究領域 植物・微生物間相互作用研究ユニット 主任研究員
宮本拓也	茨城県農業総合センター 園芸研究所 病害虫研究室 主任
魏 傳釗	みかど協和株式会社 研究開発本部 育種研究室 研究員

賀来華江	明治大学 農学部 生命科学科
宮田雄一郎	神奈川県農業技術センター 横浜川崎 地区事務所 野菜チーム 臨時技師
中島敬介	株式会社サカタのタネ 品質検査部 種子病理グループ
小島寛子	愛知県農業総合試験場 園芸研究部 次世代施設野菜研究室 技師
堀川英則	愛知県農業総合試験場 環境基盤研究 部 病害虫研究室
山本晴康	株式会社石黒製菓所 商品部
松田絵里子	石川県農林総合研究センター農業試験 場 資源加工研究部 生物資源グルー プ 主任技師
西岡輝美	大阪府立環境農林水産総合研究所 食 の安全研究部 防除グループ 主任研 究員
出穂美和	山口県農林総合技術センター 農業技 術部 資源循環研究室専門研究員
鈴木智範	大分県農林水産研究指導センター 農 業研究部 病害虫チーム 研究員
大坪早貴	宮崎県総合農業試験場 生物環境部 技師
山城麻希	沖縄県農業研究センター 病虫管理技 術開発班 研究員

【学会活動状況】

1. 研究会・談話会等開催報告

第23回果樹ウイルス性病害の国際会議 (ICVF)

去る6月8日(日)～12日(金)まで、盛岡市アイーナを会場に第23回果樹ウイルス病害の国際会議 (23rd International Conference on Virus and Other Graft Transmissible Diseases of Fruit Crops, ICVF2015) が開催されました。ICVFは世界各国の果樹・小果樹のウイルス・ファイトプラズマ研究者が一堂に集い、落葉果樹(リンゴ、ナシ、モモ、オウトウ、アンズ、スモモ、オリーブなど)と小果樹(イチゴ、キイチゴ類、ブルーベリーなど)のウイルス病・ファイトプラズマ病に関する研究を国際的に協調しながら推進することを目的に、3年ごとに開催されている国際会議です。これまで、第1回のスイス(開催年1954)から、オランダ(1955)、イギリス(1956, 1973, 2000)、デンマーク(1960)、イタリア(1962, 1994, 2012)、ユーゴスラビア(1965)、ドイツ(1967, 1976, 2009)、フランス(1970, 1985)、ハンガリー(1979)、カナダ(1982)、ギリシャ(1988)、オーストリア(1991)、アメリカ(1997)、スペイン(2003)、トルコ(2006)、

ドイツ(2009)、ローマ(2012)と、主にヨーロッパ諸国を中心に開催されてきましたが、今回、筆者が実行委員長となり、盛岡市で開催されました。ICVFの60年におよぶ歴史の中でアジアでの開催は今回が初めてになります。

海外(20カ国)から約60名、日本人を含めると約100名の参加者で、前回のローマ会議(2012)の参加者(約150名)と比較すると、人数は少なかったのですが、これは開催地がヨーロッパから遠くはなれた日本であったこと、また一部の国を除いてヨーロッパやカナダでは研究環境(研究費や旅費など)がますます厳しくなっている状況を反映しているようです。一方、中国からは10数名の参加があり、これまでのICVFでは日本も含めてアジアの研究者の参加人数は0～数名であったことを考えると、日本での開催の意義は大きかったと思われます。

会議の前夜(7日)の“ウェルカムドリンク”には、海外からの出席者30名ほどが参加し、3年ぶりの再会に時間を忘れて会話が盛り上がっていました。8日からは招待・特別講演6題、口頭42題、ポスター41題の研究発表がありました。今回の会議で特徴的だったのは、次世代シーケンシング(NGS)を用いた果樹類からのウイルス・ウイロイドの検出に関する研究報告が前回と比較して格段に増加したこと。その結果として、これまで落葉果樹ではほとんど報告のなかったDNAウイルスも含め、新規なウイルスが多数報告されました。NGSは、病原ウイルスの分離や接種が困難な木本性果樹類からのウイルスの検出・診断にとっては、まさに革新的な技術となるため、各国の研究者が精力的に取り組んでいます。今回のICVFの講演内容につきましては、植物ウイルス病研究レポートの特別号として印刷する予定です。

招待・特別講演は、日本およびアジアの果樹ウイルス・ウイロイド研究を紹介するため、以下のように、日本の研究者による内容としました。

○岩波 徹(農研機構・果樹研究所リンゴ研究拠点) : Occurrence and countermeasures of citrus greening in the sub-tropical islands of Japan.

○難波一郎(神戸植物防疫所) : Plant quarantine system for virus diseases of fruit crops in Japan.

○兼松聡子・八重樫元(農研機構・果樹研究所リンゴ研究拠点) : Mycoviruses in *Rosellinia necatrix*: Features of potential virocontrol agents.

○吉川信幸(岩手大学農学部) : Apple latent spherical virus vectors: a tool for new plant breeding techniques.

○前島健作(東京大学農学部) : An overview of plum pox disease in Japan.

○佐野輝男ら（弘前大学農学生命科学部）：Viroids and viroid diseases in Asia.

今回の会議中に二国間の共同研究につながった例を一つご紹介します。リンゴの代表的なウイルス病にモザイク病があります。世界的に発生しており、これまではリンゴモザイクウイルス（ApMV）が病原と考えられていました。今回、岩手大学と果樹研究所リンゴ研究拠点との共同研究で、リンゴモザイク病には、ApMVが病原のモザイク病の他に、新規ウイルス（リンゴえそモザイクウイルス、ApNMV（仮称））が原因となるモザイク病があることを報告しました。会議中に知ったことですが、中国でもリンゴのモザイク病が多発しているそうです。ただし、感染樹からはApMVが全く検出されないため、病原ウイルスは未確認だったようです。中国の研究者の多くが、中国で発生しているリンゴモザイク病の病原はApNMVではないかと推定していましたが、これから日本と中国の共同研究で明らかにすることになりました。

会議中日（10日）のエクスカージョンでは、午前中に果樹研究所リンゴ研究拠点のウイルス保存園とリンゴ品種‘ふじ’の原木を見学し（写真）、その後、岩手県の農業研究センターと生物工学研究センターを訪問後、午後は世界遺産の平泉（毛越寺、中尊寺）を訪れました。前日（9日）の夜に開催したレセプションは盛岡市の神社（盛岡八幡宮）の畳の部屋で開催し、日本食に加え日本舞踊のアトラクションもあり、海外からの参加者が岩手の文化・伝統に触れる機会になったと思います。また、レセプションでは岩手県知事の達増御夫妻をお迎えしたこともあり、参加者からは大変好評でした。3年前のローマ会議では、世界遺産‘コロッセオ’を見下ろす寺院のテラスでICVFの懇親会が開催されたこともあり、今回の盛岡での開催にはプレッシャーも感じていましたが、最終日には、海外からの参加者から「運営もホスピタリティーも大変すばらしい会議だった」とほめられ、肩の荷が下りた心地でした。次回のICVFは、2年後にギリシャのテッサロニキで開催することを決定し、第23回ICVF Moriokaを終了いたしました。

最後になりましたが、今回の国際会議の開催にあたり、農水省、日本植物防疫協会、青森県、岩手県、山形県、盛岡市、地元企業からは多大なご協賛をいただきました。また招待講演および座長を快くお引き受けいただいた皆様には、この場を借りて厚くお礼申し上げます。（吉川信幸）



果樹研究所（盛岡）の圃場内にあるリンゴ品種‘ふじ’の原木の前での記念撮影

【今後の学会活動予定】

1. 部会

(1) 北海道部会

日程：平成27年10月15日（木）～16日（金）

場所：北海道大学（札幌市）

(2) 東北部会

日程：平成27年9月28日（月）～29日（火）

場所：東北大学川内キャンパス（仙台市）

(3) 関東部会

日程：平成27年9月10日（木）～11日（金）

場所：宇都宮大学農学部（宇都宮市）

(4) 関西部会

日程：平成27年9月28日（月）～30日（水）

場所：徳島県郷土文化会館あわぎんホール（徳島市）

(5) 九州部会

日程：平成27年11月11日（水）～12日（木）

場所：ホテルセントヒル長崎（長崎市）

2. 談話会・研究会等

(1) 第10回植物病害診断教育プログラム

日程：平成27年7月27日（月）～31日（金）

場所：神戸大学（神戸市）

(2) 平成27年度植物感染生理談話会

日程：平成27年8月24日（月）～26日（水）

場所：道後温泉メルパルク松山（松山市）

(3) 第9回植物病害診断研究会

日程：平成27年10月26日（月）～27日（火）

場所：ALVE 多目的ホール（秋田市）

(4) EBC 研究会ワークショップ2015（第11回）

日程：平成27年9月15日（火）

場所：JA ビル会議室（千代田区）

【関連学会情報】

第30回報農会シンポジウム

『植物保護ハイビジョン2015』のご案内

—シンポジウム第30回の節目に立ってみる“過去・現在・未来”—

趣 旨：近年、地球レベルでの温暖化や急速な人口増加に伴い安定的な食糧生産の確保が懸念され、また、我が国における農業環境も、気象条件の変化、耕作放棄地の増大、後継者不足、外来生物の侵入など厳しさが増大している。公益財団法人報農会では、その時々植物防疫を取り巻く課題を取り上げシンポジウム「植物保護ハイビジョン」を開催しており、今回、第30回を迎える。これを機会に、農業生産に重要な課題である病害虫・雑草の発生の現状を整理し、防除に向けた今後の方向性を探る。

主 催：公益財団法人 報農会

協 賛：日本応用動物昆虫学会、日本植物病理学会、日本農薬学会、日本雑草学会

日 時：平成27年9月16日（水）10:15～17:00

場 所：「北とぴあ」つつじホール（東京都北区王子1-11-1）

TEL 03-5390-1100（会場への連絡は出来ません）

JR 京浜東北線・地下鉄南北線：王子駅下車、徒歩2分（下図参照）

開 会：10:15～10:30 挨拶

理事長 田付貞洋

講 演：10:30～11:20 気候変動が水稻生産に与える影響とその対策

農研機構中央農業総合研究センター 中川博視

11:20～12:10 外来雑草の侵入実態

農研機構中央農業総合研究センター 黒川俊二

12:10～13:20 昼食・休憩

13:20～14:10 長距離移動性イネウシカ類の薬剤

抵抗性発達の現状と今後の課題
農研機構九州沖縄農業研究センター 松村正哉

14:10～15:00 病原菌の発生生態に基づく土壌病害の防除

群馬県農業技術センター 池田健太郎

15:10～16:00 都市型市民農園の開発と運営

—つくば市中心部での一事例—

株式会社谷口企画 谷口米二

16:05～16:45 総合討論

参加費：一般 2,000 円 学生 1,000 円

申込み：参加をご希望の方は、9月10日までに下記連絡先までEメールまたはFAXで所属・連絡先と氏名をお知らせ下さい。当日、参加費と引き換えにテキストをお渡し致します。なお、当日の参加も可能です。

連絡先：公益財団法人 報農会

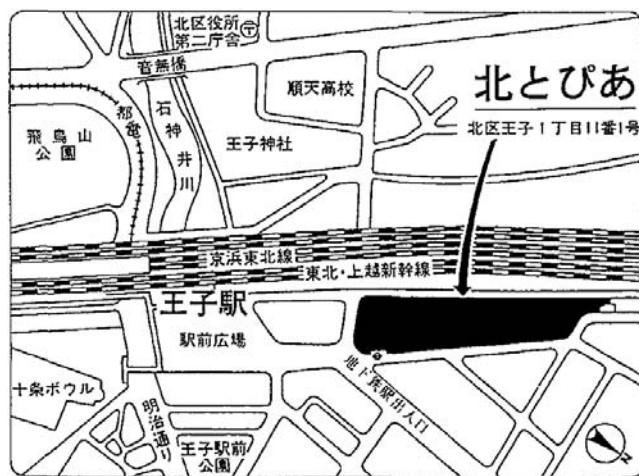
事務局：藤田肖子、渡辺敦子

〒187-0003 東京都小平市花小金井南町1-12-11

BLOSSOM みさと

TEL/FAX 042-452-7773

E-mail: khono511@car.ocn.ne.jp



【海外長期出張報告】

1. 米国での研究留学報告

筆者は2014年4月から2015年3月までの11ヶ月間、米国のペンシルバニア州立大学（Penn State）農学部植物病理学科のMarilyn J. Roossinck教授のラボに研究留学していた。結論から述べると、今回の留学は筆者にとって大変有意義なものとなった。

その理由として、以下の三点があると思う。一つ目は、留学先でやりたい研究コンセプトと漠然としたビジョンが筆者にすでにあったこと。そして、二つ目が、筆者のコンセプトやビジョンがDr. Roossinckとマッチしたこと、である。この二点は、留学だけに限られた話ではないが、すごく重要だと思う。実際に、留学先を選ぶのに特に留意を払ったのは二点目であった。三点目は、このタイミングで行動する動機があったこと。筆者は留学の経験がなく、自

身に足りていない部分としての自覚があった。任期付き助教の一回目の審査時に留学経験を問われたことも強い動機となった。留学期間が短かったことも挙げておく（トラブルや嫌な目に遭う前に帰国してきた）。

Penn State は学生数が 40,000 人を超える巨大な公立総合大学であるが、1855 年に創立された農業高校が前身であり（筆者が勤務する大阪府立大学と似ている）、全米で最初に農学の学士号を授与した大学でもある。Penn State がある State College は東海岸ペンシルバニア州の中央部に位置する典型的な大学町で（全米屈指の治安の良さ！）、一緒に渡米した嫁と息子も楽しく過ごせたようで何よりであった。米国では、平日は朝 9 時半から夕方 5 時半くらい



写真 1：Roossinck ラボの集合写真。後段の右から 2 番目が Dr. Roossinck でその左隣が筆者。



写真 2：Roossinck ラボが入っていた研究棟 The Millennium Science Complex の実験室風景。完全なオープンラボで、実験台が何十列と並んでいる。

まで実験や勉強をして、土日は休むという比較的のんびりした生活を送っていた。

Dr. Roossinck の研究テーマは“RNA Virus Ecology and Evolution”である。学生のころから Roossinck ラボの論文を多数読んでいたが、Roossinck ラボに留学することになるとは夢にも思っていなかった。筆者は大阪府大の在外研究員派遣事業を利用して留学していたが、在外研の応募が始まる半年以上前にメールで「行って良いか？」と尋ねたところ、全く面識がなかったにもかかわらず快諾していただいた。おそらく、サラリーが大阪府大から出ていることが大きかったのだろう（日本人だったことも大きかったかも知れない）。

Roossinck ラボは、Roossinck 教授以下、Research associate 1 人、ポスドク 3 人、大学院生 1 人、学部生 2 人、Visiting Researcher 3 人、ラボマネージャー 1 人のやや小規模なラボで、アメリカ人は 4 人でその他アフリカ人とアジア人で



写真 3：ラボメンバーみんなでキノコ試料のサンプリング。



写真 4：筆者が住んでいた State College の風景。のんびりした田舎町だが、芝生等の手入れは行き届いている。

国際的なラボであった。各々が独立した研究テーマを持っており基本的に個人個人で研究を進めていたが、週に一回はラボメンバー全員に生データを報告する機会が設けられていた。Dr. Roossinck は、一つ一つの実験の quality、特にコントロールの取り方にとっても厳しい人で、適切なコントロールのないデータは全く認めてもらえず（当たり前だが）、とても勉強になった。余談だが、米国ではちょっとしたことでも（実験がうまくできたとか、良い週末を過ごせたとか）、みんなが「Good !!!」と言ってくれた。些細なことでもうれしい気分になり、精神上とても良かったと思う。

米国での実験環境は、多くの方々が web などの留学体験記で書かれているのとはほぼ同じ印象（最小限の機器を共通利用し、その分人材にお金をかけて効率的に研究している）を受けたのでこれ以上は書かないことにする。私が見た範囲でだが、人を効率的に動かす「システム」がとにかく良くできていて、研究者が自分自身のサイエンスに集中しやすい環境にある。他には、週に 1, 2 回は著名な研究者や売り出し中の若手研究者のセミナーを聞いたことが大きかった。動物や植物ウイルスの研究者が集まる Virology Club もあり、筆者も 30 分のプレゼンをした。さらに、滞在中に、植物病理学科長公募の公開インタビューや数多くのジョブインタビューを聞く機会に恵まれた。これらのセミナーはプレゼンのスキルアップに大きな役割を果たしていると思う。米国の大学の Principal investigator になるような研究者はプレゼンも本当に上手で工夫されていておもしろい。そう簡単には真似できない「技術」だろう。

ちなみに、英語は、研究に関することでは聞く力はついたように思う。セミナーの内容はほとんど理解できた。一方で、しゃべる方は、日本語と同程度に discuss できるには至らなかった。深い discussion を英語ですするためには（私には）あと 2, 3 年は必要で、日常会話をスラスラこなすにはさらに 5, 6 年は必要という印象である。

最後に、一年弱の留学では本当の意味で米国での研究の楽しさ/厳しさは分からない。それでも、私は、留学先でやりたい研究があるならば（ただ留学したいではダメだと思う。行くだけで何か special なことが起こるわけではない）、短期間でも良いからどんどん海外での経験を積むべきだと思う。11ヶ月間という短い期間であったが、海外の慣れない環境で研究したという経験だけでも自信を得られたし、本当に special な研究者も見ることができた。見た目も、しゃべる言葉も、そして、考え方も異なる人々が共存する（必ずしも分かり合っているわけではないが）、diversity に富む世界の居心地の良さは米国で生活しなければ

ば分からなかったし、分野は違えども米国でがんばっている日本人研究者の方々との出会いもモチベーションを上げてくれた。これまでの研究人生のハイライトの一つと言っても過言ではない。

（大阪府立大学生命環境科学研究科 望月知史）

2. オランダ・ワーゲニンゲン大学での研究生生活

日本学術振興会海外特別研究員の過去 3 年間の派遣先を見てみると、半数以上がアメリカへ渡航しており、次いでイギリスとドイツがポスドク先として人気である。この 3 カ国で全体の約 8 割を占めている。特別研究員などの助成制度ではなく、研究室に直接雇用される場合でも、おそらく渡航先の上位 3 カ国は変わらないだろう。アメリカやイギリスにポスドクのポストを求める日本人研究者の割合が多く、それ以外の国の研究事情となると途端に情報量が乏しくなる。筆者は、2012 年 3 月から 2015 年 3 月までオランダ王国ワーゲニンゲン大学の植物病理学研究室に客員研究員として滞在したが、オランダでの生活は手探りでのスタートであった。こうした経緯から、特にワーゲニンゲン大学での研究環境やシステム、オランダでの生活を紹介したい。

ワーゲニンゲン大学は正式には、Wageningen University and Research Center と呼ばれ、大学 (University) と国立の DLO 農業研究機構 (Research Center) の統合により 1998 年に設立された総合研究機関である。周辺に 1,500 を超える企業が隣接し、農業と食品産業における産学官連携の代表的な成功例として知られている。大学を中心に半径 20 km 圏内はアメリカのシリコンバレーに倣い、フードバレーと呼ばれる。2000 年以降、新キャンパスに大学機能を移転・拡大しており、それに伴って学生数も急激に増加している。設立当初の約 2 倍となった学生のうち、4 人に 1 人がオランダ国外出身者という国際的な大学である。ワーゲニンゲン大学には 5 つの専攻（植物・動物・環境・社会・食品）があり、それぞれの専攻に農業研究所が属している。例えば、植物科学専攻には Plant Research International と Applied Plant Research という DLO 農業研究機構の研究所が所属している。大学の研究室が基礎研究を行い、研究所は応用的あるいは実用化研究を担っており、学生はどちらの研究室にも分属の希望を出せる。

植物科学専攻に属している植物病理学研究室には 6 名の教員が在籍しており、教員ごとのグループを最小単位として研究を行う。グループ名は主とする研究対象の病原菌を表しており、Clado（トマト葉かび病菌）、Verticillium（半身萎凋病菌）、Phytophthora（疫病菌）、Botrytis（灰色か

び病菌), Bacteria (細菌病), Sol (ナス科抵抗性研究) の 6 グループである。働き始めた当初のラボメンバーを振り返ってみると、主要戦力であるポスドク (客員研究員を含む) と博士学生が 49 名, テクニシャンが 6 名, また 25 名程度の修士学生が在籍する大所帯であった。他大学の教員がサバティカル休暇を利用して滞在することがあり, ポスドクや博士学生は著名な研究者と議論する機会が得られる。筆者の滞在中はカリフォルニア大学バークレー校 Brian Staskawicz 教授, マッセイ大学 Rosie Bradshaw 准教授が数ヶ月間滞在された。ポスドクと博士学生は教員に雇用されているため, グループの人数は研究予算の規模を反映していた。週一回の研究報告会を各々のグループで行い, また金曜日の朝は植物病原菌を扱う他の研究室も含めた 100 名ほどの合同セミナーが催される。スピーカーはポスドク・博士学生が担当し, 一年に一度は自身の研究発表が求められる。大学から給与を得ていない客員研究員やポスドクには, 施設利用料である bench fee の支払いを求める研究室が一般的であるが, 当研究室ではこれを徴収しない方針で, 外部からのポスドク・客員研究員であっても研究費は受け入れグループが負担する。より多くの人材を集め, 知識を交流させることで研究を進展させる狙いがあるが, 外国人研究者としては研究費が不要であるため, 敷居が低く感じられた。

実験室内は各グループが行き来しやすいよう設計され, 実験機器や試薬・消耗品などは共有である。大学内に日常的に使用する消耗品や試薬のストックがあるため, 注文から数時間で試薬がベンチに置かれていることもあり, 大規模研究施設においてのみなせる合理的なシステムであった。グループの枠を超えてポスドク・博士学生同士が共同研究することは日常茶飯事であり, 異なる研究室同士であっても特にボスに許可を得る必要がなく, 個人の裁量に委ねられていることに驚かされた。また基本的に研究テーマは自身で考えだす必要があり, 自主性を持って研究に取り組む力が養われるが, 学生によっては博士号の取得に時間がかかるという弊害もある。オランダ人の合理的な思考が外国人にも根付いており, 費用対効果を意識した博士学生の研究姿勢は日本の学生も見習わなければならない。

オランダ人の成人は, よほどの高齢者でなければほとんどが英語を理解するため, オランダ語の習得が必須ではない。市役所やスーパーマーケットの店員でさえも英語での会話に支障がない。これは外国人の割合が多いワゲニンゲン市近郊だけでなく, いずれの都市であっても同様である。日本人に限った話だが, 居住するために必要な手続きが他の外国人よりも簡便であり, また日本の運転免許証を



写真 1 : Pierre de Wit 教授と筆者。



写真 2 : 植物科学専攻が入るビル (Radix) と研究室メンバー。

持っていれば, オランダの免許証の発行も容易である。ワゲニンゲンはオランダのほぼ中央に位置しており, ドイツ国境まで車で 30 分, ベルギーまで 1 時間, ベルギーを越えフランスまでは 3 時間ほどなので, 日帰り旅行で世界遺産を巡ることができる。物価や税金は欧州の中でも比較的安いほうだが, 外食代が高く, 家探しにも苦勞する。オランダ全土で住宅不足であるが, 特にワゲニンゲン近郊は学生数の増加でさらに住宅事情が悪化しているため, 渡航前からの家探しをお薦めする。

ヨーロッパ共同体 EC の発足に伴い, 安価な農産物を輸入せざるを得なくなった 80 年代のオランダは, 農業大学と農業研究所の統合や, 施設園芸への集約化など大胆な農業政策を打ち出した。さらに日本の農林水産省にあたる部局を解体し, 経済産業省内に編入するなど, 農業を産業と捉えることで農業輸出大国となった。TPP 妥結が迫る現在の日本も当時のオランダと似た状況にあり, 研究以外にも多くのことを学べる国である。最後に, 留学中は山田朋

宏氏，寺見文宏氏，大西純氏，篠原信氏，また日本学術振興会および公益財団法人発酵研究所から多大なご支援を頂いた。ここに記して厚く御礼申し上げます。

(農研機構・野菜茶業研究所 飯田祐一郎)

【関連トピック】

「次世代型土壌病害管理（ヘソディム）マニュアル」と「ナス科作物の土壌病害に対する *Bacillus* 属等微生物の効果的活用マニュアル」の公開

農業環境技術研究所では，農林水産省委託プロジェクト研究の支援を受けて，土壌伝染性病害の対策に役立てるための2つのマニュアル（次世代型土壌病害管理（ヘソディム）のためのマニュアル，ナス科作物の土壌病害に対する *Bacillus* 属等微生物の効果的活用マニュアル）を各県および大学関係者と共同で作成し，webで公開しました。

「次世代型土壌病害管理（ヘソディム）マニュアル」(<http://www.niaes.affrc.go.jp/techdoc/hesodim/>) は，一般に防除が困難とされる土壌病害に対し，ヒトの健康診断の発想で対策・管理を行う「ヘソディム」の概要と病害ごとの適用事例（個別のマニュアル）の2章で構成されています。概要では，ヘソディムの考え方や流れ，診断項目の説明，評価方法，対策リスト作成のポイントなどが紹介されています。個別のマニュアルでは，ヘソディムに基づいて各県で開発されたトマト青枯病，ショウガ根茎腐敗病，レタス根腐病，ダイズ茎疫病，アブラナ科野菜根こぶ病，ブロッコリー根こぶ病およびキャベツ根こぶ病の病害管理技術が盛り込まれています。今後，このマニュアルを多くの研究者や指導員に利用してもらうことで，他の病害や作物でもヘソディムに基づく病害管理技術が開発されることを期待しています。さらには，ヘソディムが広く普及することで，持続的な農業生産につながる土壌管理の推進に役立つと期待しています。

「ナス科作物の土壌病害に対する *Bacillus* 属等微生物の効果的活用マニュアル」(http://www.niaes.affrc.go.jp/techdoc/bacillus_agent/) では，土壌病害に対する新たな微生物農業開発に資するために，生産地で深刻な被害をもたらすトマトやナスの土壌病害（トマト・ナス青枯病，トマト萎凋病，トマト根腐萎凋病）に対し発病抑制効果が見出された微生物株について，その培養から植物体への処理までの手順と抑制効果の実例などが取りまとめられています。このマニュアルの活用により，防除効果の実証例数が蓄積し，土壌病害に対する新たな微生物農業開発の推進に役立つことが期待できます。

(吉田重信)

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介，書評，会員の動静，学会運営に対するご意見，会員の関連学会における受賞，プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ：

高橋賢司，吉田重信，宇賀博之，宇垣正志，松下陽介

編集後記

学会ニュース第71号をお届けします。本号は，今年度推薦された名誉会員・永年会員のご紹介と会員の動静を中心に掲載しました。

新しく10名の皆様が名誉会員・永年会員に選ばれました。長年にわたる学会へのご貢献に深く感謝申し上げますとともに，植物病理学，農業振興などにおける国内外での精力的なご活躍に対して敬意を表したいと思います。

今春も多くの方々の異動がありました。ご退職された皆様，長い間大変お疲れさまでした。異動された皆様，心機一転，新しいポストでのご活躍を祈念しております。学位を取得された皆様，おめでとうございます。益々の研究のご発展を祈念します。新たに多くの皆様を本会にお迎えしました。今後のご活躍と新しい風をもたらしただくことを期待しております。

喜ばしいお知らせです。道家紀志氏が瑞宝中綬章を今春受賞されました。誠にありがとうございます。本会の発展ならびに農学の教育・研究への多大なご貢献に感謝申し上げます。

6月に開催された果樹ウイルス性病害の国際会議の開催報告を掲載しました。今回はアジアから多くの参加者があり，招待・特別講演では日本の研究者が日本・アジアの果樹ウイルス・ウィロイド研究を紹介するなど，会議を日本で開催した意義は大きかったようです。吉川信幸先生はじめ開催にご尽力された皆さまのご苦勞に感謝申し上げます。

米国を訪れた望月知史さんとオランダを訪れた飯田祐一郎さんに在外研究記を書いていただきました。貴重な経験談を刺激に，海外での研究を目指す若手研究者がこれからさらに増えることを期待します。

学会の年内までの活動予定を掲載しました。部会や談話会・研究会など多くの集いが開催されます。奮ってご参加いただきますようご案内申し上げます。

最近設けた「関連トピックス」の欄に研究プロジェクトの成果を紹介しました。会員に広く紹介したい、このような情報がありましたらどしどし学会ニュース編集委員会にお寄せください。

(高橋賢司)
